

私も若槻の住民は



若槻地区の皆さん、私は上野区に住む染織家の小山仁郎(こやま・じろう)と申します。仕事場が東京中心だったため、ここに住むようになったのは昨年から。しかし、家は長野冬季オリンピックの前に建ててあり、時折帰って仕事もしていました。

名刺の肩書にも使っていますが「染織家」が職業です。聞きなれない方が多いと思いますが草木染めの技法を使って絹地に伝統的な花鳥風月などを染め上げる友禅染の作家、噛み砕いて言えば「職人」と思ってください。今年81歳になりますが、作家として独立して半世紀をはるかに越えました。

画家を下地に染織作家へ

最初は洋画家を目指しました。終戦間もない、誰もが今日明日の食い扶持に困った時代。絵描きでは食べて行けないことが分かり、友だちの助言もあり染色の道に入りました。弟子入りした先が江戸友禅師の倉谷憲作という松代町出身の先生。徒弟制度の色濃い時代で、ここでの3年間はご多分に漏れず厳しい修行でした。当時東京には200人近い友



禅染の職人がいましたが、信州人が多かった。半分くらいを占めていたと記憶しています。

私が作家としての地歩を固めたのは、東京・新宿区にアトリエあかね染色工芸を設立してから。その後数々のコンクールや公募展に出品を続けました。その中で自分にとって自信になったのは、昭和53年の第1回日本染織作家協会展で訪問着

『冬野』が文部大臣賞を受賞したことでした。これを機に全国に名前が知れ注目されるようになりました。制作の注文も相次ぎ、女性向け雑誌の窓にも紹介されました。

美の中に生きる

女優が着る着物を染める仕事も多いです。檀ふみが着た『夕顔』(能を題材として着想)は雑誌に大きく取り上げられました。池内淳子、高橋恵子、紺野美沙子などの着物もよく覚えています。着物のほか屏風や額装、障壁画などの仕事もします。来年、新国立美術館に出品する『平安追想』と題した障壁画の大作を制作中です。アトリエのほとんどを占めており人の出入りさえできないほど。

私の仕事は細かな手作業で時間もかかります。染料の草木は自分で野山に出て集めてきます。ススキ、サクラやクルミの皮など信州の草木は絶品の色合いが出ます。作品のアイデアを固めるに1~2年くらい。実際の仕事に着手して着物で1~2カ月、屏風などの大作は2~3年になりますか。

伝統に新たな風を

私は友禅染の伝統である花鳥風月を“革新的”に表現したいと考えています。作品への評価もその辺にあるのではと自負し、「東洋美の現代的表現」を追い求めて生涯を全力投球する—これがモットーです。幸い娘が私の後を継いで独立しました。地域の皆さんに草木染め友禅を知ってもらうこともいいことだと思いますので、教室を開ければ…楽しい

ですね。

【メモ】小山さんは長野市真島生まれ。第一美術協会の顧問、審査委員。長野県工芸美術会理事長。信州美術会会員。受賞歴は中央、長野県内のコンクールなどで文部大臣賞、都知事賞、県知事賞など多数。出展はフランスなど海外にも及ぶ。

(構成 広報委員長)